編集後記

『真実心』第三十九集が出来上がりましたので、皆様にお届けさせていただきます。

平成二九年度も例年通り、宗教講座を五回開催させていただき、皆様から多くのご参加、ご意見を賜りました。書面を借りてお礼を申し上げます。改めて、平成二九年度の各講座を振り返ります。

第一回は、「子どもと家族を支えるケア――いのち　暮らし　共生――」というテーマで、特定非営利活動法人こどもコミュニティケア代表理事の末永美紀子氏が、今日の子どもに対する医療と福祉、特に量的ケアを必要とする子どもたちに関して、ご自身の体験から具体的にお話し下さいました。自分の関心分野とも近いことと、偶然にも居住する地域から近いこともあり興味深く聞かせていただきました。末永氏が特に強調されたのが、「共生」に関することで、現状の特別なケアを必要とする子どもに対する医療・福祉の隙間を具体的に分かり易く説明していただきました。最後に、学生たちに対してミルトン・メイヤロフの『ケアの本質』の内容を挙げられ、対人援助職に求められる疑問を持ち続け

ることで生まれる成長の大切さを述べられたことに賛意を強く感じました。

第二回は、京都大学大学院人間・環境学研究科教授の鎌田浩毅氏が、「地球の歴史から考える防災――「大地変動の時代」に向けて――」では、まず東日本大震災、熊本震災を取り上げ、地震の発生メカニズムについて分かり易くお話し下さいました。神戸で震災を体験した私には、氏が地震に対する「予測と制御」の大切さを述べられたことに強く共感しました。科学技術が進んだ現在においても、地球の内部で起きていることに対して、まだ「予測と制御」が完全に行えない私たちに対して、地震や噴火は戒めとして、これからも忘れてはいけないことを再認識させていただきました。最後の部分で、長い尺度でものを見ることの大切さと熱中して取り組むことの大切さを述べられたことは、学生を含めて、多くの参加者が共感されていました。

第三回は、「福祉のまち梅津を目指して――「一人じゃないよ見守っているよ」の輪を広げる――」をテーマにして、京都市梅津地域包括支援センター管理者の髙橋岳大氏が京都の高齢者状況から地域包括支援センターの役割をお話していただきました。特に、近年、増加する社会的に孤立する高齢者への支援が大切であることを、具体的なお話を通じて分かり易く説明をしていただきました。長生きすることは良いことであるが、その結果

として孤立する社会は何かが間違っていることに気づかせていただきました。それを防ぐためにも各地域で包括支援センターのような機関と誰も孤立させない取組を進めておられる髙橋氏のような熱い心を持たれたスタッフがおられることに嬉しくなるお話でした。

第四回は、本学短期大学部客員教授で、シンガーソングライター、ＮＰＯ法人 self 代表の松田陽子氏による「生きてるだけで価値がある」でした。氏は、ご自身の体験から「愛の三原則」の大切さを述べられています。三原則とは「愛情のこもった眼差し」、「愛情のこもった優しい肉声」、「スキンシップ」を挙げられ、それらによって多くの難関を迎えても、現在のご自身の生活が充実したものであることを強調されていました。氏は、これまでも本学にお出でいただき、学生たちに多くの刺激を与えていただいています。男女同権の社会と言われて久しいですが、現実には女性にとって不利益な場面も多々あることは否定できません。そのような状況において、「愛の三原則」が今後の女性が活躍する社会を構築する要因になると確信しました。

第五回は、東本願寺青少幼年センターの木村理佳氏が「やわらかい言葉――出会いから――」というテーマでお話していただきました。氏は合掌の後に、親鸞聖人の「遠く宿縁を慶べ」「念仏には無義をもつて義とす」の言葉を挙げて、人の縁と自分の姿をお話され

ました。ご自身の大学時代、東本願寺奉職以降のこれまでの生活と真宗との関係を具体的に述べられる中で、私たちが感じる様々な感情（邪見、憍慢）が湧いてくることに対して、親鸞聖人がどのような教えをされたかを、とても分かり易くお話されました。最後に「たくさんの考え方の違う人たちに会う」ことを推奨されていることに感銘を受けました。まさしく、他者との関わりの中で「仏法を聞く」ことの大切さを改めて感じさせていただくお話でした。

以上、平成二九年度に開催された五回の宗教講座の各先生方のお話された内容を簡単にまとめさせていただきました。お分かりのように各分野は異なっていますが、人と社会、それらを支える絆と親鸞の言葉が深く関連していることが共通していることに気づきます。私の筆力不足で、各先生方の述べられた全てに及んでいないことをお許しください。

（編集委員会）